

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 7 月 18 日 10:55AM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 36,500～42,000 円

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】 (NY ダウ) 37,500～45,000 ドル
(S&P500) 5000～6500

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 (ナスダック 100) 20,000～23,000
(ナスダック総合) 18,000～21,000

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 130.000～151.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000～102.000

エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均



【週足 エリオット波動分析】

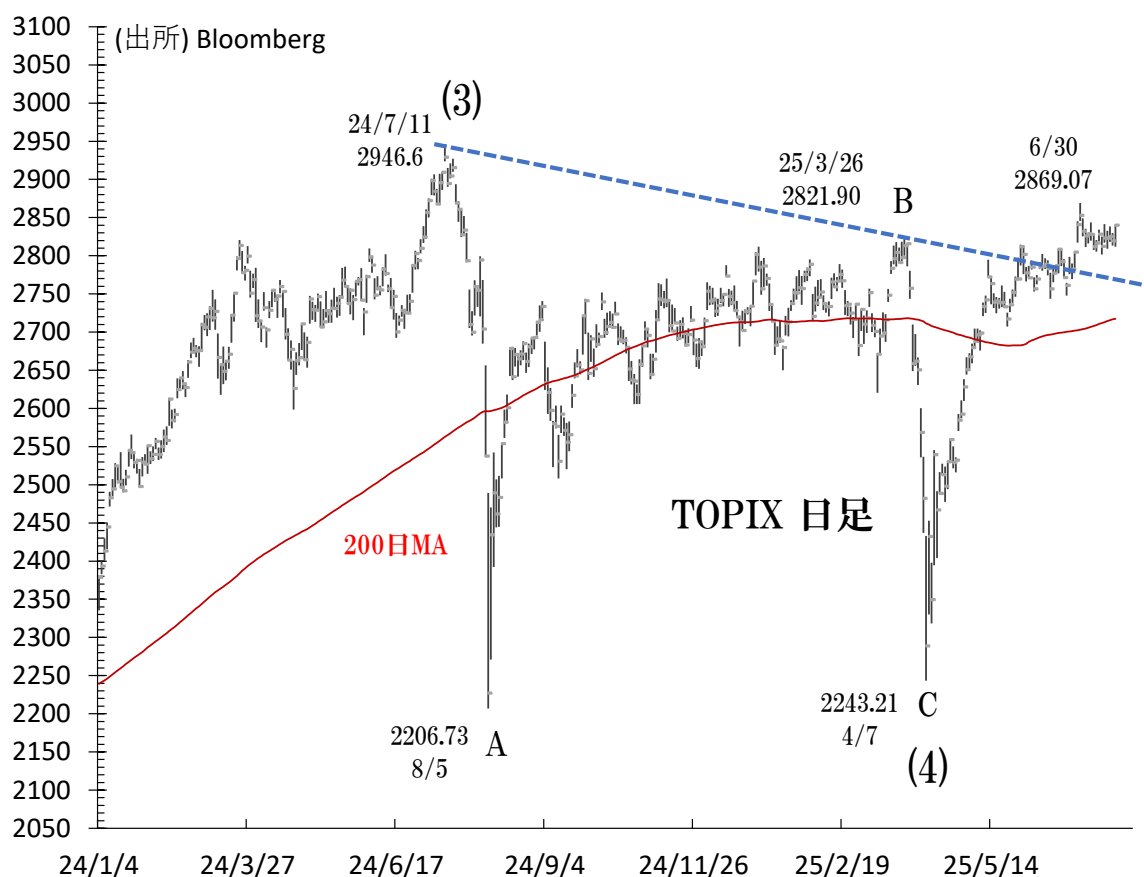
日経平均は、重要サポートとしての 200 週 MA を上回って推移しています。同 MA を今後も維持する限り、プライマリー上昇③波は依然継続中とみられます。

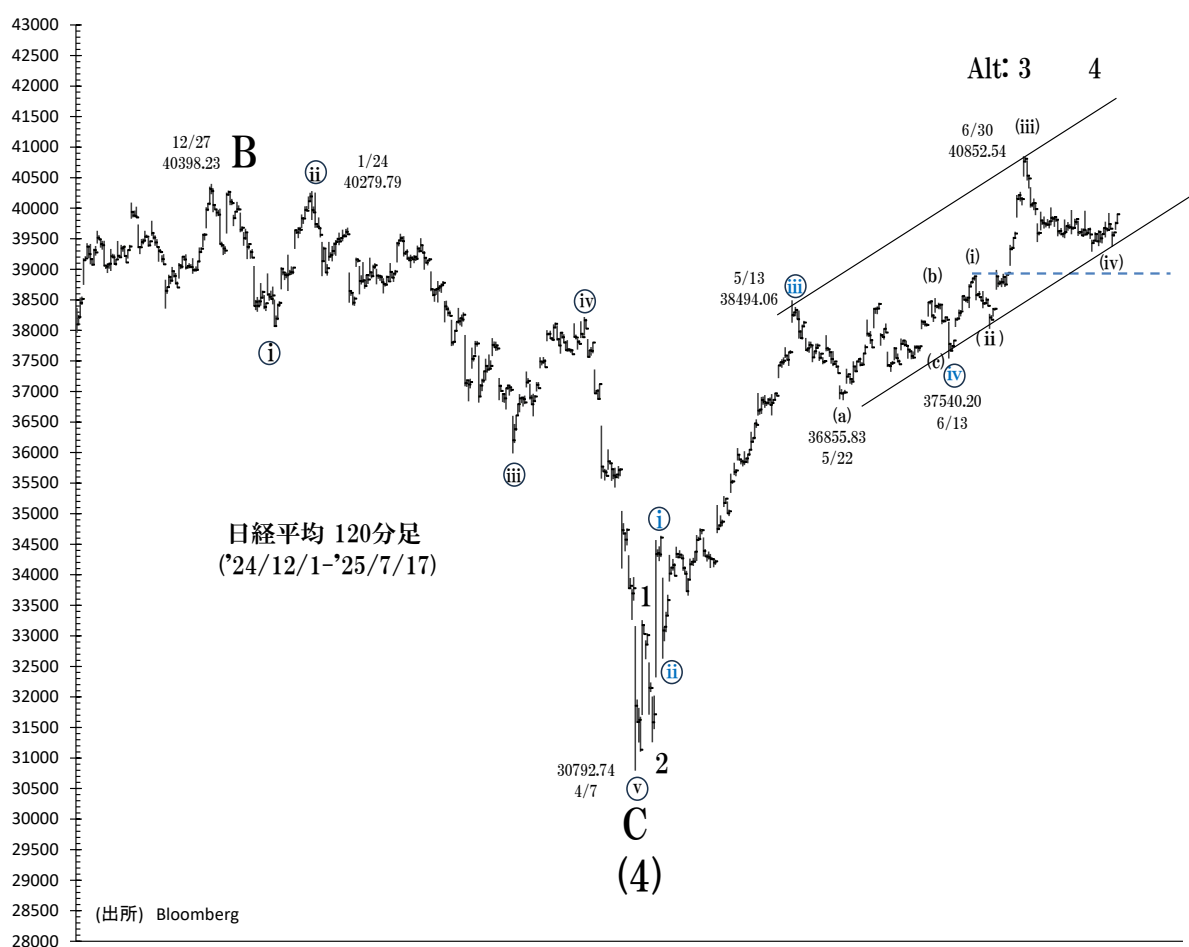
日経平均は、インターミディエイト級第(5)波の上昇が進行中です。この第(5)波は、20 年 3 月コロナショック底(16358.19 円)からのラリー中「最後の上昇」に相当します。

早ければ 7 月～8 月、順当なら 9 月～10 月に、日経平均は 24 年 7 月高値(42,426.77 円)を上抜き史上最高値を更新するでしょう。

7 月第 2 週(7～11 日)に海外投資家は現物を 4030 億円買い越しました。これで 15 週連続の買い越しとなり、アベノミクス相場の始まりの時期に重なる 2012 年 11 月～13 年 3 月(18 週連続)以来、約 12 年ぶりの長さとなりました。

海外投資家は日本株を長らくアンダーウェイトしており、「持たざるリスク」から日本株再評価の機運が高まっているとみられます。





【日足・時間足 エリオット波動分析】

[TOPIX]

先に書いたように、海外投資家は現物を 15 週連続で買い越し(合計は 5.35 兆円)しており、今後も日本株再評価に伴う買いに期待できましょう。

スモール指数の最高値更新が足元で続いており、その流れを TOPIX もキャッチアップする展開を予想します。24 年 7 月の過去最高値(2946.60)試しが視野に入っています。

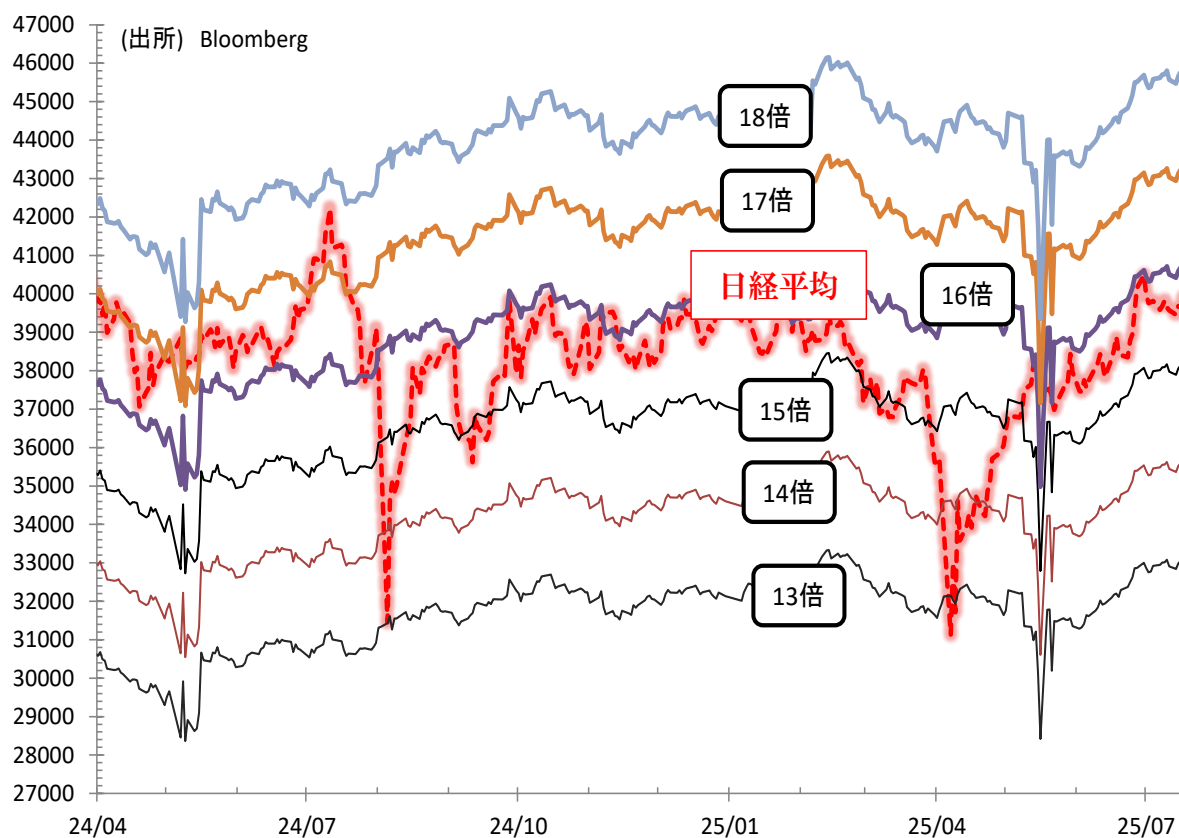
[日経平均]

40,852 円(6/30 高値)からは第(iv)波の調整とみられ、それは目先のにも終わる可能性があります。その後は第(v)波の上昇が続き 4 万 1000 円水準を試すと思われます(この見方は 38,885 円を維持する限り有効です)。

日経平均 4 万円より上の価格帯は出来高が少ない「真空地帯」です。そこでは売り方の踏み上げ、新規の先物買いなどにより、日経平均は大きく跳ねやすいでしょう。

[予想 PER 別の日経平均水準]

7月17日の日経平均予想 PER は 15.71 倍・予想 EPS は 2539 円。この水準は、過去最高の EPS・2564 円(2/13)に近いものです。



NY ダウ・S&P500



【NY ダウ日足 エリオット波動分析】

(プリファード・カウント)

22 年 10 月安値(28,660ドル)からの(B)波による上昇は今年 1 月高値(45,054ドル)で終わり、以来、C 波による下落局面です。足元、C-(2)波完了を見極める局面が続いています。今後は C-(3)波の下げにより、4 月安値(36,611ドル)を大きく下回る展開が想定されます。

ただし 45,054ドルを上抜くと、この波動カウントは否定され、他の波動カウントを採用することになります。これまでの戻り高値は 44,885ドル(7/3)です。

(オルタナティブ・カウント)

22 年 10 月安値(28,660ドル)以来の五波構成による上昇(＝プライマリー級第⑤波)は、今年 4 月安値から最後の上昇(＝インターミディエイト級第(5)波)が進行中です。

あるいは S&P500・ナスダックで検討しているごとく、4 月からの上昇を「トライアングル」における⑥波とカウントすることもできます。

上記波動カウントの正否はすぐに判明しませんが、少なくとも当面の高値を付けつつあること、相応の調整入りが近い、などの点で一致しています。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

7 月 17 日には最高値を更新、一時 6304 まで上昇しました。

過去 100 年近くにおよぶ超長期レジスタンスラインは、今年 7-9 月[6333]に位置しています。同ラインを試すのは昨年 12 月に続き 2 度目のことです。前回(昨年 12 月)、同ラインに達した後、その後の 4 カ月で S&P500 は 21%下げました。

FactSet によれば、S&P500 の(12 カ月先)予想 PER は 22.3 倍(7/11 時点)。これは 5 年平均(19.9 倍)より 12%、10 年平均(18.4 倍)からは 21%、各々「割高」水準です。ひとたび調整入りとなれば、10%~20%の調整は普通に起きることでしょう。

【S&P500 長期エリオット波動分析】

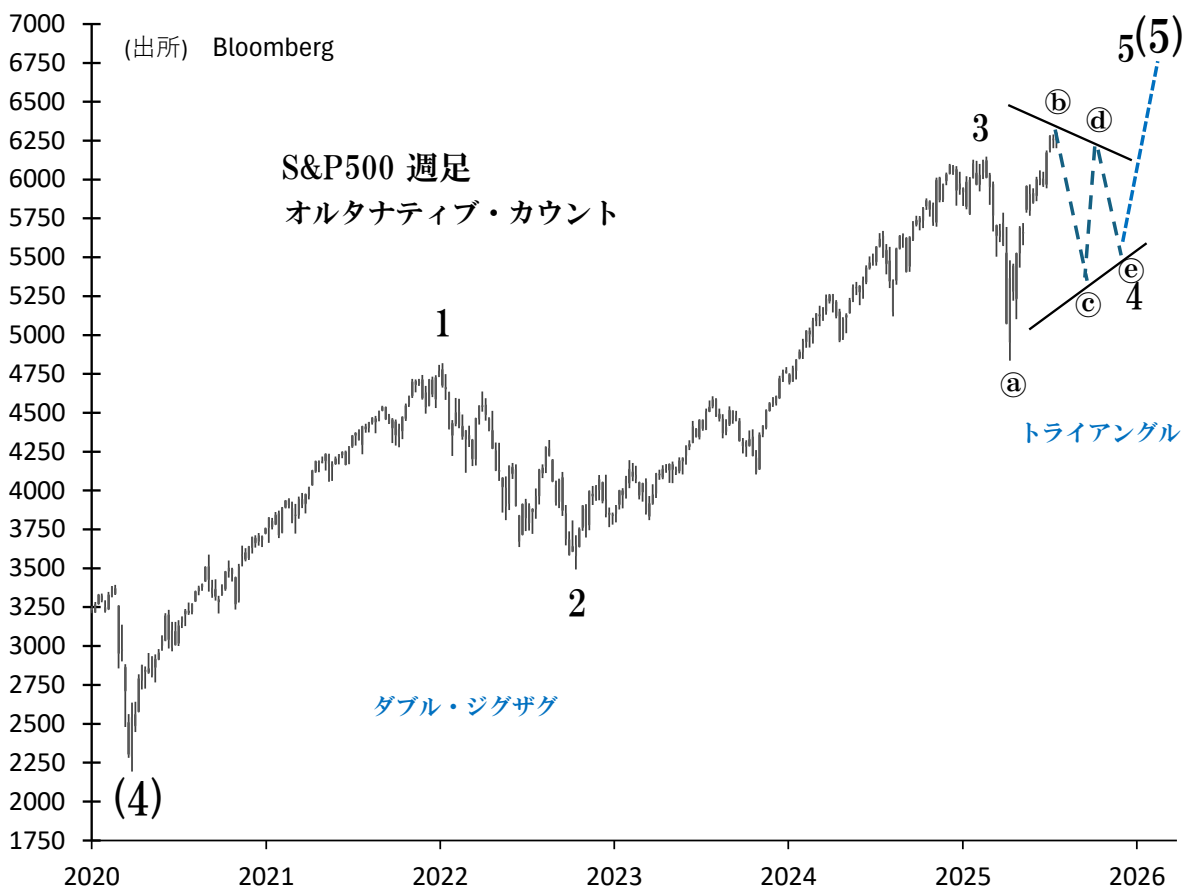
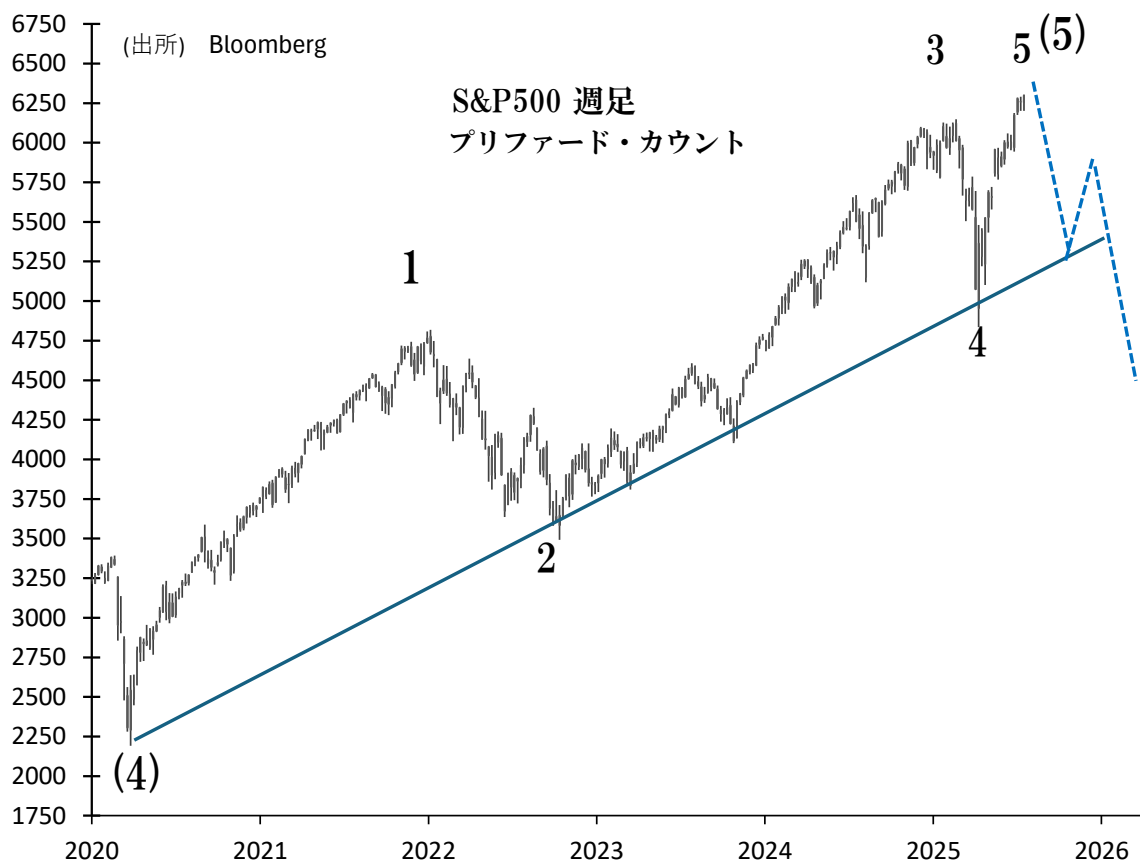
(プリファード・カウント)

4 月安値(4835) からの上昇は、インターミディエイト級第 5 波に位置付けられ、それが終わると長期にわたる調整スタートとなります。それは 4 月安値を大きく下回ることが予想されます。

(オルタナティブ・カウント)

4 月からの上昇は、トライアングル中⑥波のリバウンドに位置付けられます。

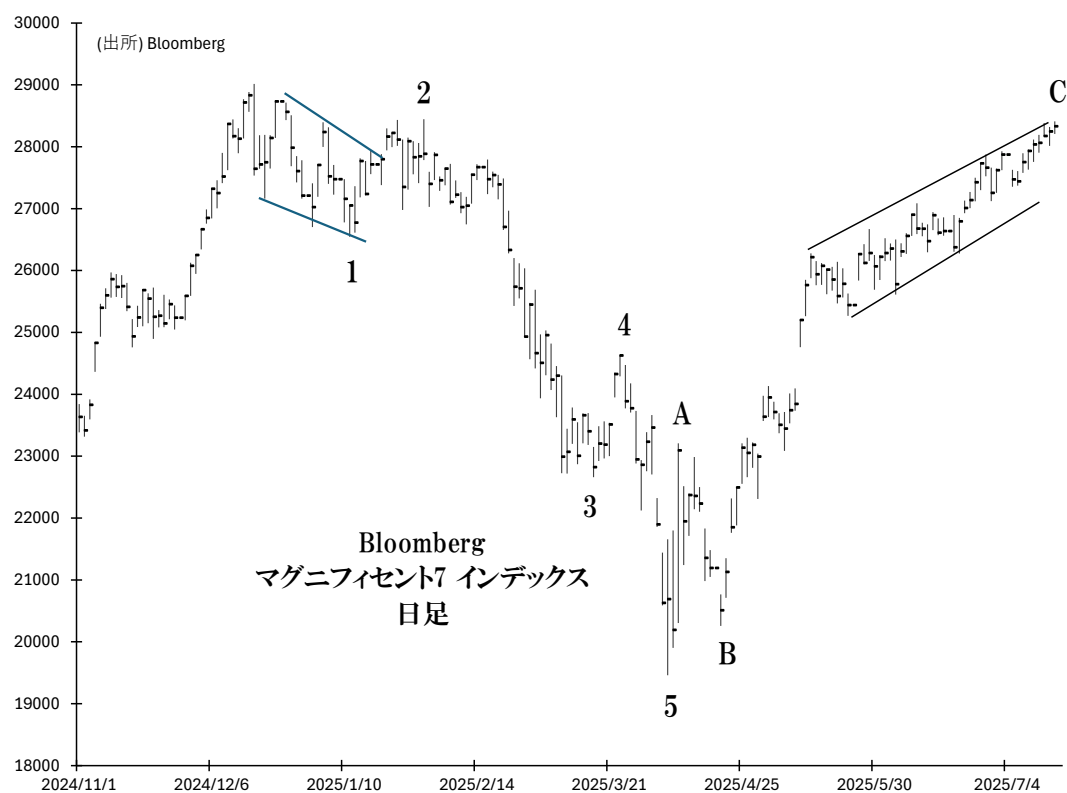
近々㊦波の下げがスタートするとみられ、それは㊤波(2 月~4 月)下げ幅に対し、62%~66%の大きさ(813~866 ポイント)になるでしょう。そうすると㊦波により S&P500 は 5400 を下回る展開になりそうです。



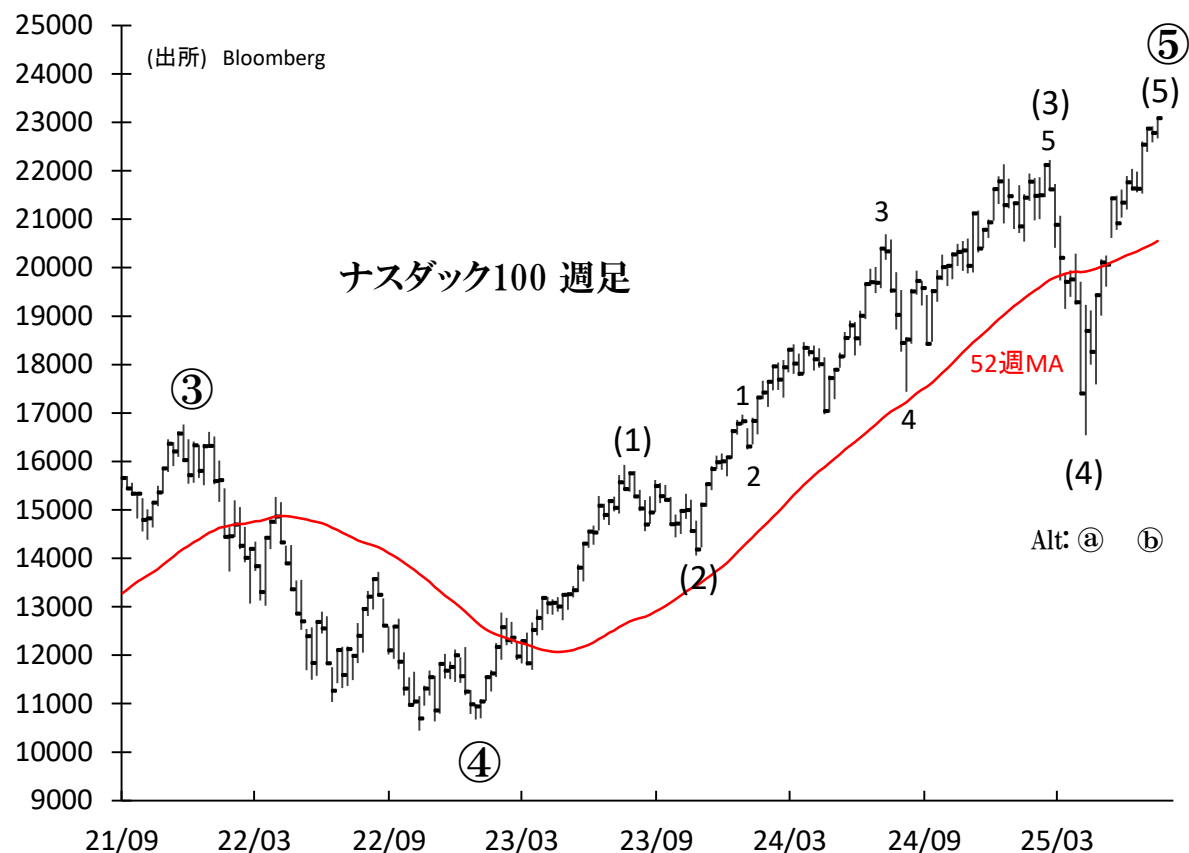
[ダウ輸送株平均] 第(1)波の 66%戻り水準から反落



[マグニフィセント 7] エンディング・ダイアゴナル



ナスダック



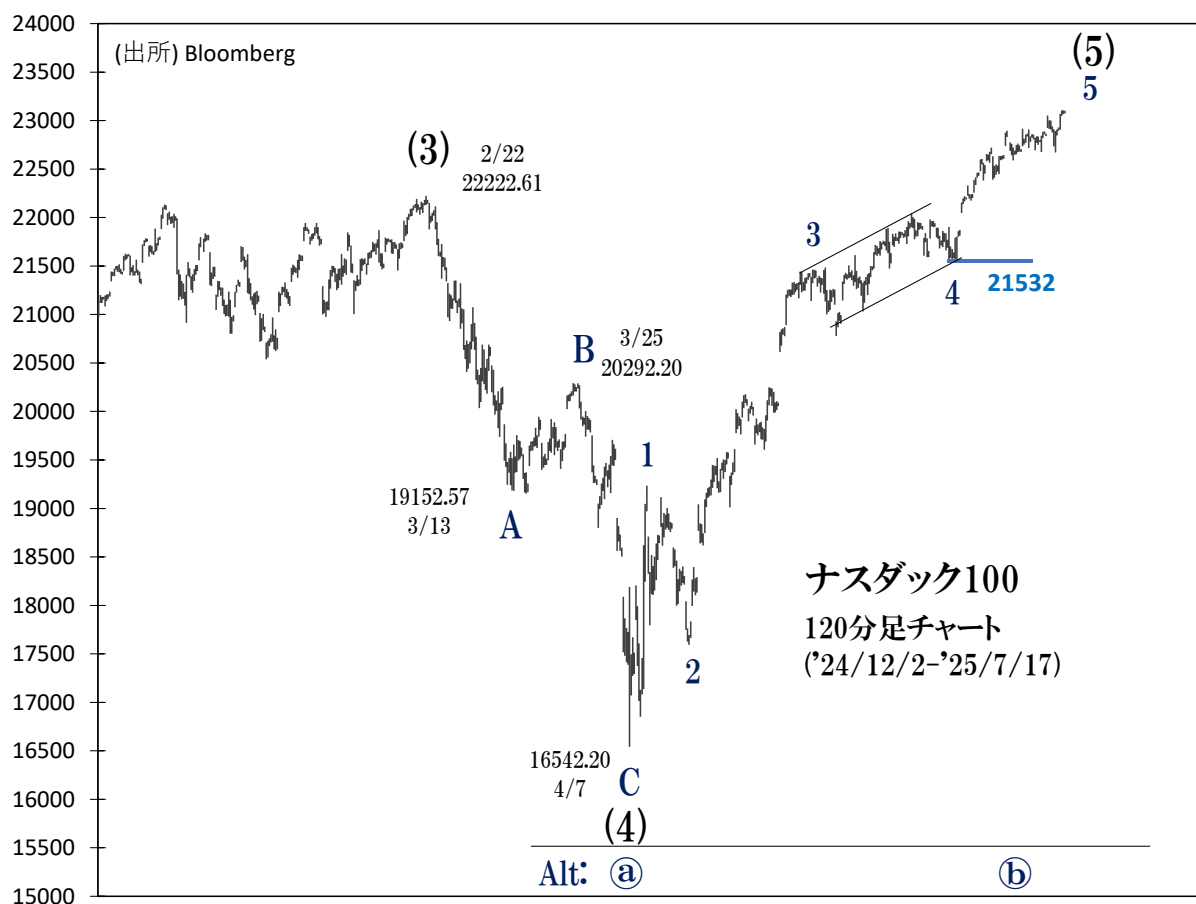
【ナスダック 100 週足 エリオット波動分析】

(プリファード・カウント)

4 月安値(16,542)からの上昇は、インターミディエイト級第(5)波の上昇に相当します。既に最高値を更新しており、第(5)波はいつ終わってもおかしくありません。遠からず調整局面が始まるとみられ、それは数年間ターム続く、長く大きなものになるでしょう。

(オルタナティブ・カウント)

4 月からの上昇は「(ランニング)トライアングル」中⑥波に当たります。これは S&P500 のオルタナティブ・カウントと同様であり、遠からず⑦波の下落に入る見通しです。これによると今後の調整規模は、想定されるシナリオではもっとも小さいと想定されます。それでも⑦波の下げ幅は⑥波のそれに対し 62%~66% となり、⑥波の高値からは 3500~3750 ポイントの下げになるでしょう。



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

4 月安値 16,542 からの上昇は、インターミディエイト級第(5)波、あるいは、第(4)波「トライアングル」中②波とみられます。

フィボナッチ比率からは、上値の想定レンジとして[23,195-24,224]が導かれます。7 月 17 日には一時 22,641 まで上昇、最高値を更新しました。

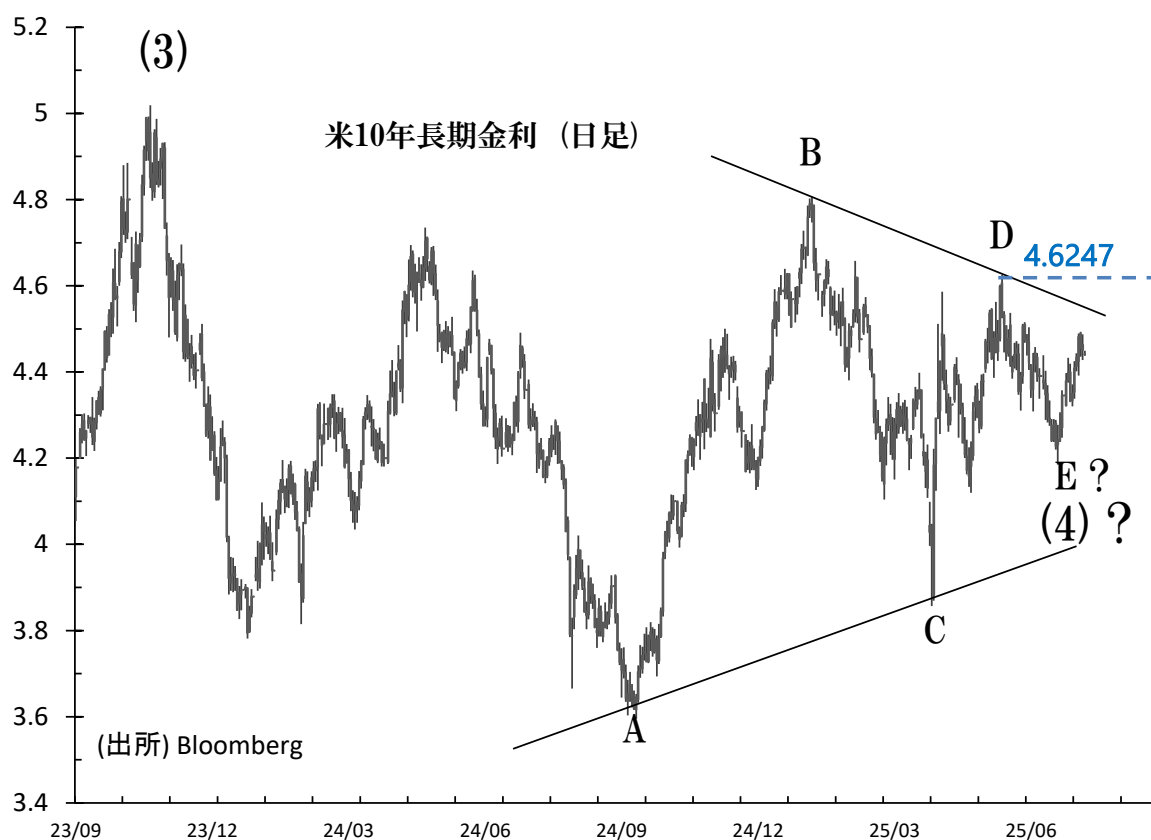
21,532 を下回ると最初の弱気トリガー発動となり、ナスダック 100 が重要な高値を付けたことが示唆されます。

米 10 年長期金利—18 年ぶり高値水準へ上昇する見通し

米 10 年長期金利は 23 年 10 月 (5.0187%) 以来の強気トライアングルを完成したか、しつとあり、近いうちに金利上昇トレンドが始まるとみられます。

トライアングル D 波の高値は 4.6247%(5/22)です。今後それを上抜くと第(4)波の完成と、第(5)波による金利上昇トレンド入りを確認できるでしょう。

長期金利は今後数カ月内にも 5.0187%をブレイクし、18 年ぶり高金利となるでしょう。そんな長期金利の急騰は、景気後退リスクを高めるとともに、株式相場には(ハイテク株を中心に)相応の打撃を与えるでしょう。



米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

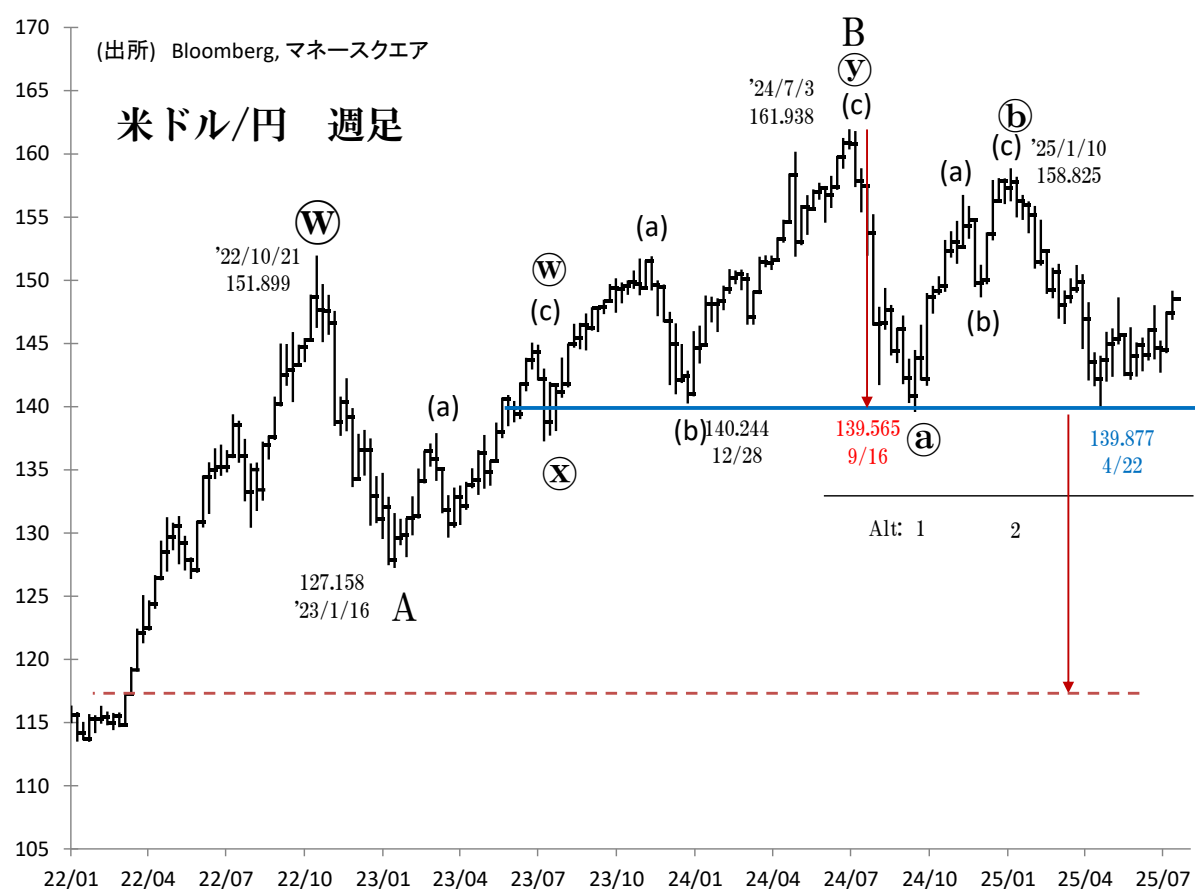
151.899 円(22/10/21)から⊗波「円高局面」が進行中です。この⊗波により米ドル/円(ドル/円)は、2028 年 4 月頃までレンジ相場を形成する、というのが基本シナリオ。24 年 7 月の 161.938 円は、15 年 6 月・125.860 円から 9 年目に付けた「8 年サイクル高値」とみられます。

22 年 10 月以来の⊗波が描くパターンとして大きくは、①[ランニング・トライアングル]、②[エクспанディッド・フラット]、これら二通りの可能性があります。

①の場合、現行 C 波は A 波安値(127.158 円)を下回りません。C 波は三波で構成され、まずは 2011 年からの上昇チャネルのセンターライン①137.190 円(7 月)がサポートレベルとみられます。

もっとも 139 円処を下抜くとヘッド・アンド・ショルダーズ型の天井パターンから明確に下放れ始め—上述したセンターラインで底入れせずに—フィボナッチ・サポートの[128.945 円]を試すと思われます。

②の場合は、現行 C 波(五波構成)はチャネル下限(②)を目指すような、より大きなドル安・円高が見込まれます。②の水準は 117.560 円(7 月)です。



【週足 エリオット波動分析】

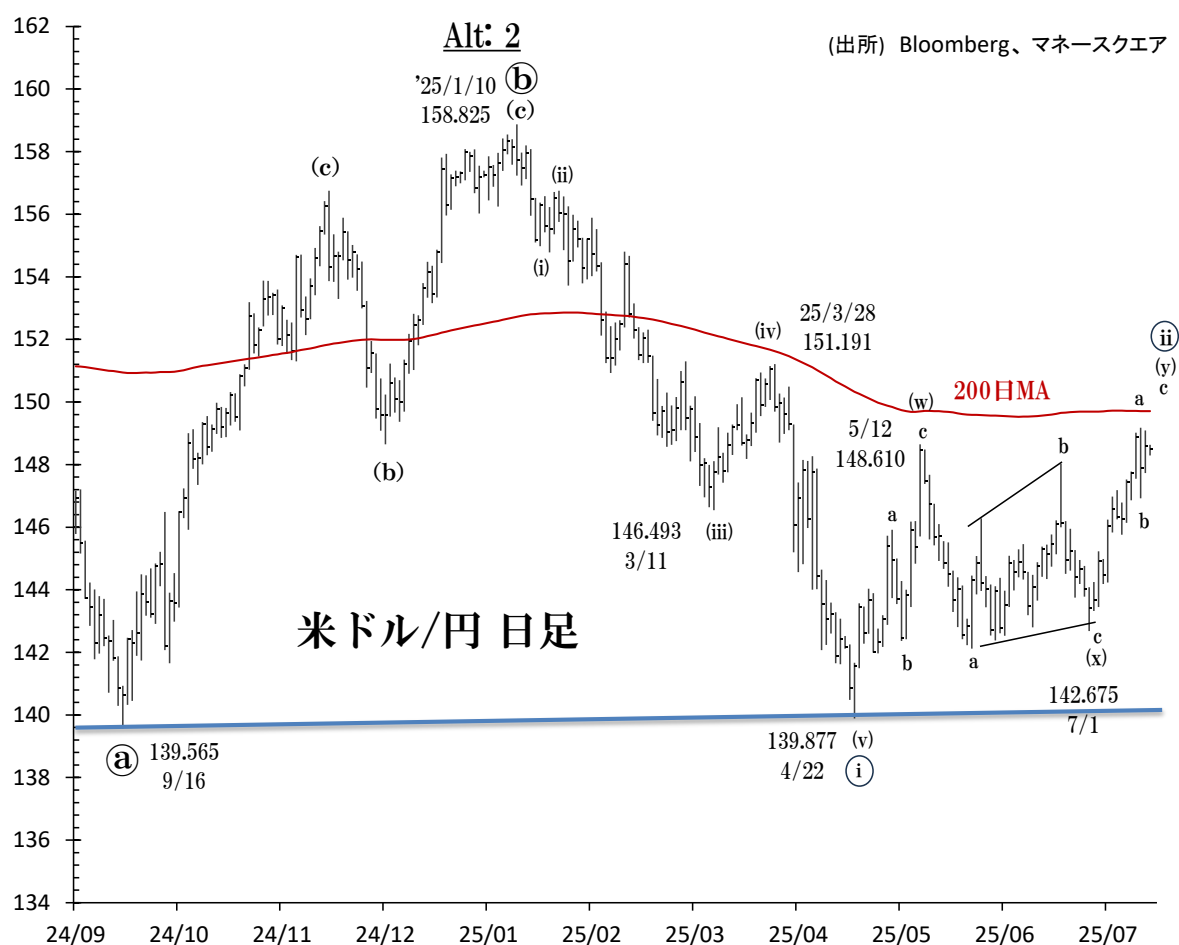
161.938 円(24/7/3)からはC波によるドル安・円高トレンドが進行中です。このC波は(先ずは)三波構成(①-②-③)が想定され、158.825 円(1/10)から③波によるドル安・円高が進行中とみられます。

今年1月からのドル安・円高を、第3波による下落とみることもできます。現時点でサブシナリオですが、これによれば、先々1ドル=120 円試しが視野に入ります。第1波と第3波が黄金分割(1:1.618)比率関係になると仮定すれば、[122.625 円]という目標値が得られます。

予想された通り、足元ドル/円は、149 円台～151 円台を試す展開となっています。ドル指数が数カ月タームの上昇に入ったとみられることも、ドル/円の上昇見通しを支援しています。

こうみるとドル/円の下げトレンド再開は、今から数カ月後になる可能性が高いでしょう。

もっとも中長期でのドル安・円高基調に変わりはなく、ヘッド・アンド・ショルダーズの垂直目標値からは、いずれ1ドル=120 円割れの可能性もみえています。



【日足 エリオット波動分析】

139.877 円(4/22)以来のマル ii 波によるリバウンドは、「ダブル・ジグザグ」(w)-(x)-(y)により継続中とみています。

142.675 円(7/1)からは、(y)-c 波によるドル高円安局面に位置付けられます。

予想していた通り 148.610 円(5/12)を上回り、7 月 16 日には一時 3 カ月半ぶり 149 円台に乗せました。

[149.351 円](1 月からのドル/円下落の半値戻り水準)と 200 日 MA(**149.710 円**)、これら複数のレジスタンスがある 149 円台は、短期的にはドル/円の上値を抑える可能性があります。

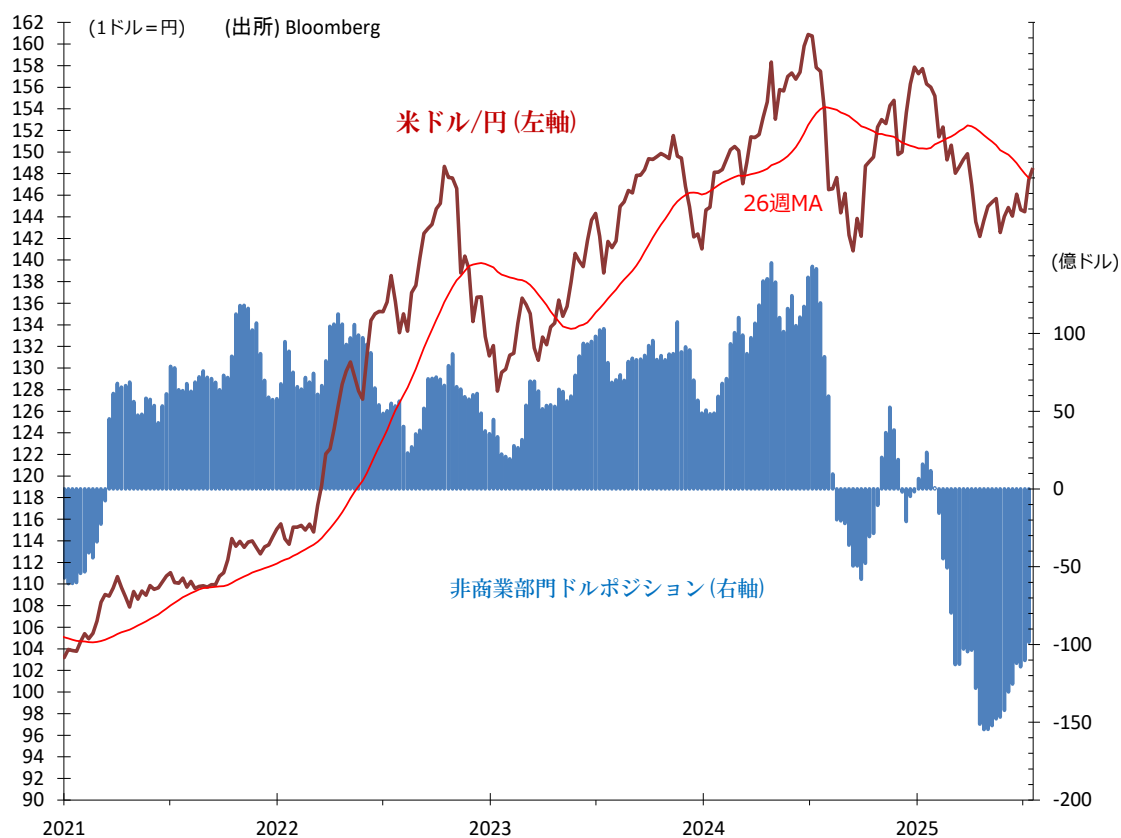
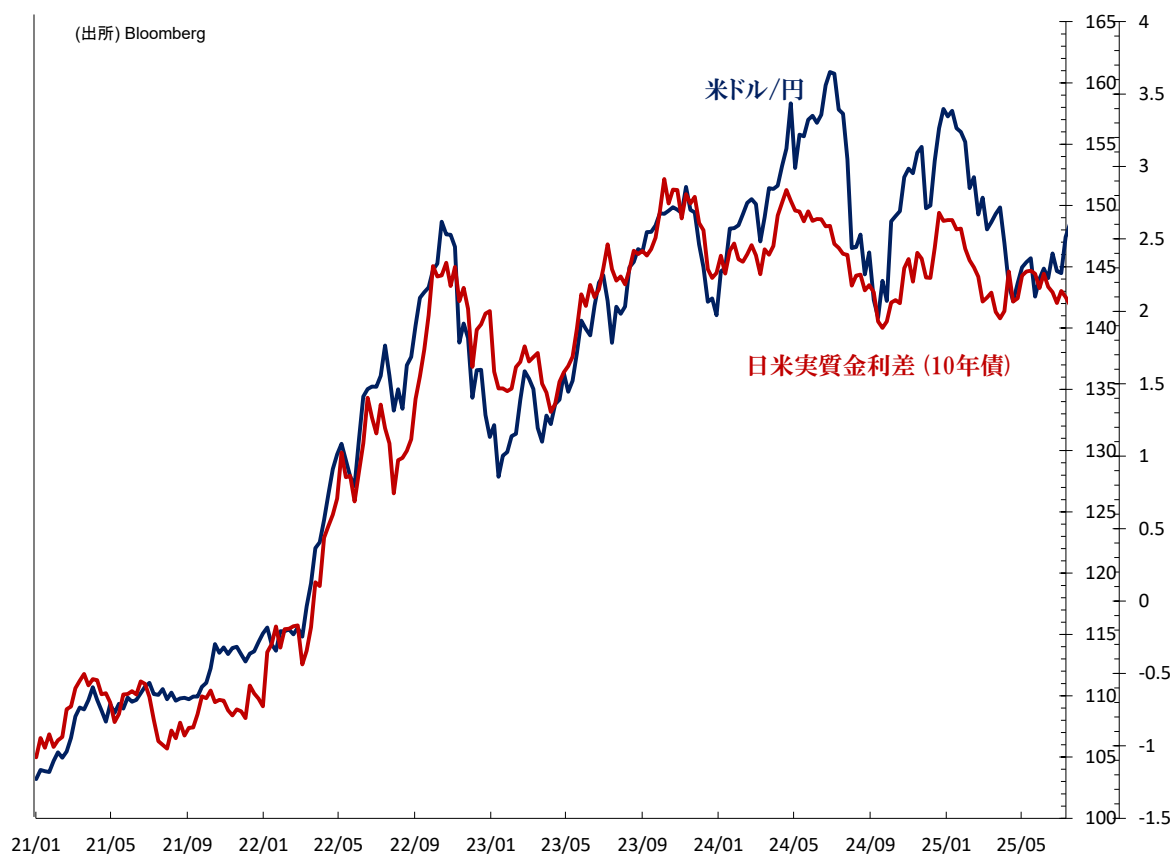
なお 150 円台回復となれば、(w)波と(y)波が等しく上がる水準**[151.408 円]**への道が開かれます。ここには**[151.586 円]**(1 月からの円高の 61.8%戻り水準)も控えています。

金利差からのドル/円推計値

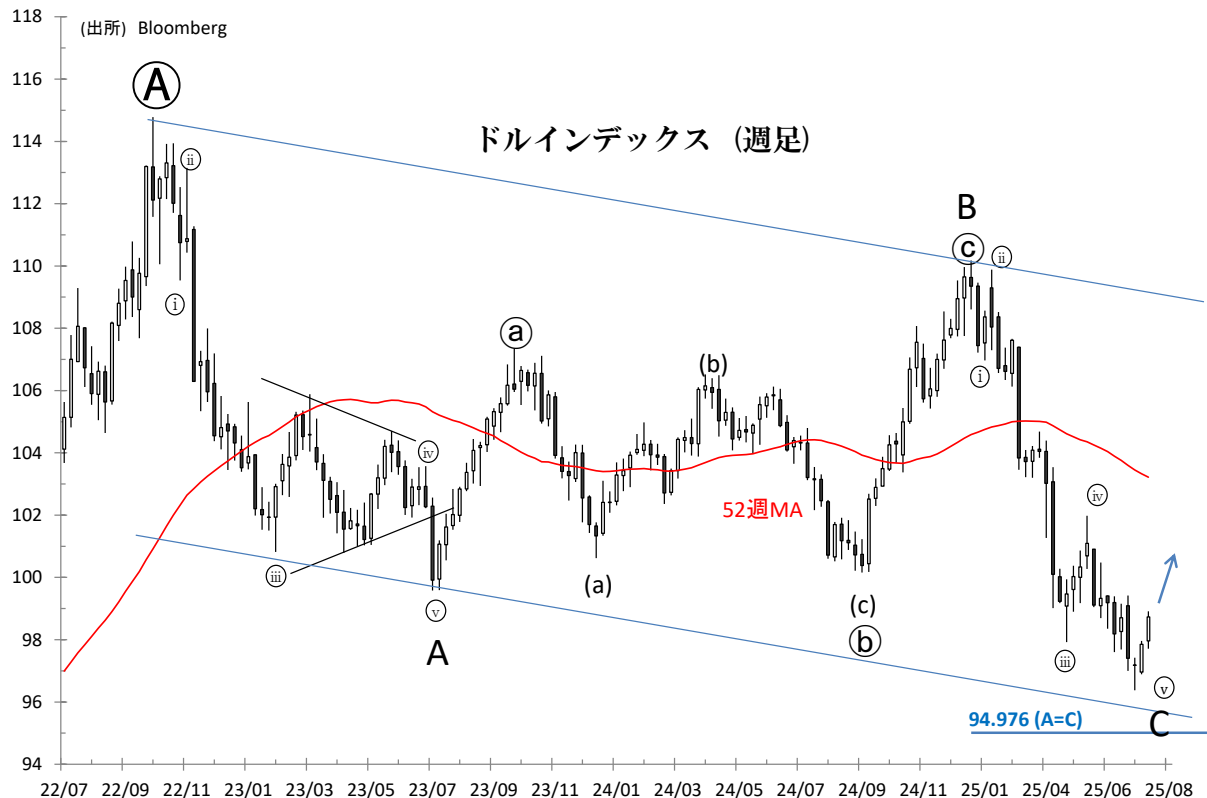
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は**[144.132 円]**です。

投機筋の円買い持ち高が 2 週続けて縮小(2025 年 7 月 8 日時点)

IMM 通貨先物市場で投機筋(非商業部門)の円買い持ち高は、前週の 110.1 億ドルから 99.1 億ドルへ 2 週続けて縮小しました。



ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

日足チャートは、5 月高値(101.977)から引いたレジスタンスラインを明確に上抜きました。年初から半年近く続いたドル安 C 波は 96.377(7/1)で終わったとみられます。それは、22 年高値からのジグザグ(A-B-C)の完成を意味するものです。

もっとも、今回のジグザグ完成を以て、22 年高値からのドル安⑤波のすべてが終了したかは疑問です。筆者は⑤波は短くとも 2028 年頃まで続くともっています。

この見方通りだとすると、足元始まったドル高は(X)波に位置付けることが適当です。⑤波全体はおそらく「ダブル・ジグザグ」(A-B-C-(X)-A-B-C)を描いていくでしょう。

因みにドル指数は、8 月から 11 月まで強くなる季節性があるようです。ここからすると、ドル高は今後 3 ~4 カ月続く可能性があり、それは当面 101.977(C 波レサードィグリー・マル iv 波頂点)を目指すでしょう。

なお可能性は小さくなりましたが、ここから何らかの拍子に 96.377 を下回るケースでは、当然 C 波が続いていることになります。この場合は 94.976 を目指すでしょう。これは、A 波と C 波が等しく下がる水準のことです。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4% 以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10% です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
